

家事メンのススメ

中 三

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で父の在宅勤務が決まった夜、父は食事のメニュー表を家族に発表した。以前から、休日にはときどき夕食を作っていたが、在宅勤務中は毎日作ると意気込んでいた。

私の家庭は、父が会社員で、母はパートタイムで働いており、ごく普通の家庭だと思う。母は昔、英語教師だったが、今は私たち兄弟三人の子育てと家事をしている。今日では、教員不足が社会問題となっており、母も復職について少しだけ意欲がありそうだ。それについて父は働いてほしいと思っっているようである。しかし、母は母の意思として、今は家事や子育てを中心としたいようである。

「男は仕事、女は家庭」という言葉はいつ頃から言われてきたのだろうか。少し調べてみると、約百五十年前に伊藤博文が推進した良妻賢母教育に結びつくようだ。その頃は、女性の社会進出や開

放政策の機運が高まっており、それに対抗するための政策である。その後の日本は、第二次世界大戦後のGHQによる急速な民主化、女性の地位向上、男女雇用機会均等法施行・改正など女性の人権向上に関する施策が多く採られてきた。それにもかかわらず、いまだに良妻賢母教育は私たちの生活に強く根付いていると思う。

母は、「男でも料理の一つくらいはできるようにならなければならぬ」と、ときどき私を台所に立たせる。父は「女性でも勉強は誰にも負けるな、やりたいことをどんどんやればよい」と、妹たちに言う。このことを強調して子供に教えなければならぬという時点で、やはり私の家族にも良妻賢母の思想は生きているのだと思う。そのためか、上の妹は救命救急医になりたいという夢をもつ一方、下の妹は「お母さんのようになりたい」と言っている。もちろんまだまだ幼いので今後どのようになるのかは分からないが、日々の生活の中でそれが将来の姿として映ったのかもしれない。母も子供の頃そのように思っていたのだろうか。それを聞いてもあやふやな答えしか返ってこなかった。しかし、両祖母も専業主婦だったこと

から、同じようになるのが当たり前だと考えていたのだと思う。

つまり、法律や制度が変わっても、脈々と引き継がれる生活の中では、女性が男性同様に社会に進出することは考えづらいのかもしれない。そして、そのことを考えると女性を社会に進出させるということばかりが、女性の人権尊重ではないと思う。

今日では、少子高齢化社会による労働力の減少に対応する策として、専業主婦の就労を後押しする施策が採られている。一見女性の社会進出が進み、女性の地位向上に役立っているように見える。しかし、「女性は家庭を守れ」と言われている時代はそれほど昔ではなく、団塊の世代が去り、「人手が足りないから女性にももっと働いてもらわなければ」という考えは、女性を都合よく扱っているとした私には思えない。

では、どうすればもっと女性の人権が尊重され、地位が向上するのだろうか。私は、男女の雇用機会の均等が不完全な現段階では、多様な選択ができることがその解決策になると考える。女性が働くことを断念する最も大きな理由は、やはり

出産とその後の子育てであろう。例えば、かなり対策が進んでいることではあるが、託児所などの増設や、利便性の向上が必要である。受け入れ数の増加ももちろんだが、パートタイムなどで働く人たちは様々な時間帯に働いている。したがって、利用時間の選択に幅をもたせることが重要だと思ふ。

育児の観点からみれば、男性の育児休暇や在宅勤務の促進が挙げられる。

また、ICTやAI技術による社会の仕組みの変化は良いチャンスである。「いつでも、どこでも」を後押しするだけではなく、例えば、「トラック運転の自動化や建設ロボットの導入などで長時間労働の改善や、これまで男性中心だった職場への女性の任用が可能になると思う。

ゴールデンウィークが明けようとしている。父のメニュー表は、注文を受けた日付で全て埋められようとしている。もしかしたら、女性の人権を向上させるために一番大切なことは、男性がより一層家事に進出していくことなのかもしれない。